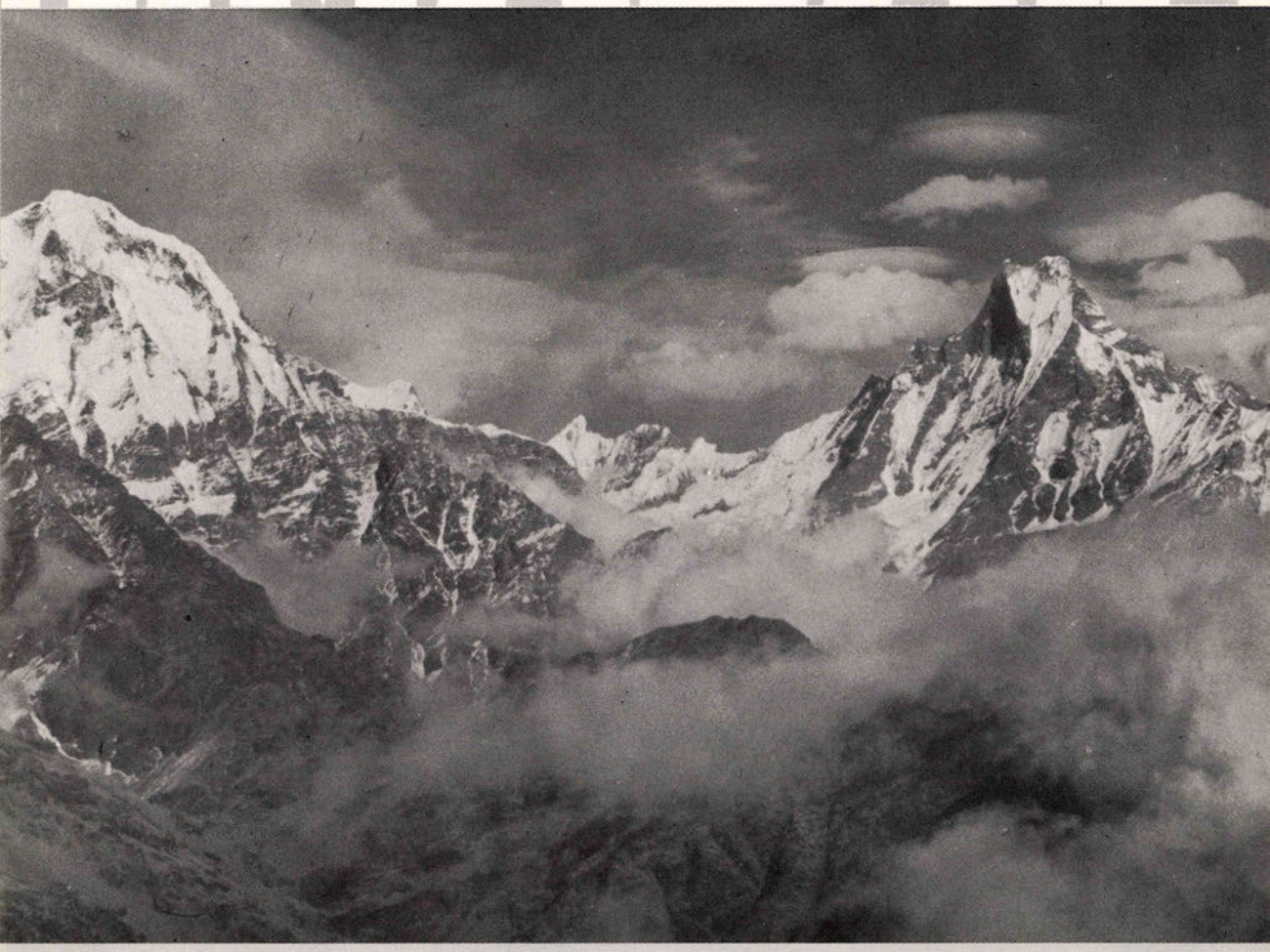
昭和51年5月9日第三種郵便物認可　昭和55年7月1日発行(毎月一回発行)　ISSN 0385－5457

HIMALAYA

ヒマラヤ
No.104

●特集　中国・モンゴル事情



1980 JUL.

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN —— HAJ

1981年ヒマラヤ登山学校隊員募集

――ナンダ・コット(6,861m)の許可内定――

ＨＡＪは、一人でも多くの意欲ある登山者にヒマラヤ遠征の機会をと、1977年以来、４度にわたり延べ90名近い会員をヒマラヤ登山学校隊として派遣してきました。このヒマラヤ登山学校は、確かな技術と経験を有する指導者（インストラクター）の統括のもとに、安全かつ確実を第１にできるだけ多くの隊員が頂上に立つことを目標として実施するものです。

国内における企画・研究・準備実務からはじまり、登山現場での高所登山技術の習得、帰国後の総括・報告までの遠征のすべての過程に隊員が参画して行なうことをモットーにしております。

81年は、日本のヒマラヤ登山が初まって45周年にあたります。ＨＡＪ登山学校はその**発祥の地、ナンダ・コット**で行なう予定です。

ナンダ・コットはインナー・ラインにあり、未解禁のピークですが、ＨＡＪの特別な活動により実現する見通しであります。渉外上、メンバーを早く確定させる必要がありますので、できるだけ早く申しこんで下さい。

目的　①ナンダ・コット（6,861 m）の登頂。
②ヒマラヤ登山の基礎習得

時期　1981年９月14日（日）～10月12日（日）
29日間（登山期間15日間）

負担金　69万円（航空運賃、他の変動によりスライド）

定員　隊員20名（申込順）　インストラクター４名

申込み　1980年８月31日まで下記あて申込むこと
（詳しい資料を送ります。）

〒160　東京都新宿区高田馬場３－23－１　淀橋食糧ビル新館506　日本ヒマラヤ協会

表紙写真　マチャプチャレとヒウンチュリ　水野 治郎

ヒマラヤ No.104

1. ヒマラヤ放談 ―― 豊島　範子

4. ヒマラヤニュース　＜地域・トピックス・新刊＞

6. 特　集　中国・モンゴル事情
中国の山へのアプローチ ―― 阿部　淳
魅惑のモンゴル ―― 大崎　正信

14. 集会案内

16. カンチ通信No.4・No.5

18. 連　載
遠征学入門⑭ ―― 清水　澄
ヒマラヤ閑話㉛ ―― 水野　勉
V・エルウィン小伝⑩ ―― 藤井　毅

24. 事務局日誌

連載 ≪16≫

ヒマラヤ放談

近年インドに旅行する人が増えつつある。1度行ってからその魅力に取り付かれ、何度も訪れるリピーターも多い。多くの人種から成る広大な国インドは、多くの魅力を秘めている。

ロマンの国、神秘の国と言われるインドであるが、インドの観光に関しての質問に答え、アドバイスする、政府観光省の東京案内所があることは以外と知られていない。

今月は、インド政府観光局東京案内所のパブリックリレーション担当の豊島範子女史に、東京案内所の仕事の内容やらインドの話をお伺いした。

豊島　範子

インド観光の窓口

――インド政府観光局の東京事務所は、いつ頃開設されたのですか？

豊島　現在、東京にある外国関係のツーリストオフィスは30～40ありますが、その中でも古い方で16年前に開設しました。

――どのような仕事をされているんですか？

豊島　観光局ですから、その国の観光を促進するという事になるんですが、具体的に言うとインド観光の全ての質問にお答えします。また、お客様を喚起するためのプロモーションがあり、一般に対して新聞，ＴＶ等のマスメディアを通して、インドのタベとかインド講座を設け、利用してもらい、正しいインドを知ってもらうことです。

――そのプロモーションは、一般の方に対してだけなんですか。

豊島　いえ、一般の方だけでなく、トラベルエージェントさんに対しても行ないます。一般の方と、エージェントの方に並行してやるのが望ましいわけです。

エージェントに対しては、資料の提供，旅程制作の相談，その他の協力や、社員教育が必要な場合はセミナーも開きます。

ポスターやパンフレットは豊富に取り揃えてありますし、一般の方にも、エージェントさんにも差し上げております。

それから、フィルムもある程度個人ではなく、団体の方なら、一般の方にも貸出しております。但し営利目的では困りますが。

――インドの夕べなどは一般の方を対象にしているんですか。

豊島　主な場合は一般の方です。去年は９月～10月初めにかけて、東京以西の地区で開催したんですが、まあまあ好評でした。インドのダンスグループと、フィルムとスライドの１時間半ほどのショーだったんですが、インドの夕べは定期的という事でなく、必要に応じて開催しております。

――定期的には何か催しを行なっているんですか。

豊島　インド講座を毎月ないし隔月位で開催しています。ある程度インドに関して著名な方を講師にお招きして、インドに行ってみたいなと思うようなテーマを選んで１～２時間位話して頂きます。

――インドの夕べやインド講座を事前に知るのにはどうすればよいのですか。

豊島　新聞に広告を出すような事はしませんが読売新聞の日曜版には必ず出ます。大手の新聞にはお知らせは出すんですが、必ず取り上げられる確証はありません。

――ところで、ここの事務所のスタッフを紹介していただけますか。

豊島　インド人３人と日本人とで計８人です。ボスはミセス・ブイ・パンディです。５代目所長で女性では初めてです。

――業務時間は、

豊島　月曜日から金曜日までで、９：30～17：30までです。尚、昼も業務を行なっていますので、

利用できます。

ビザの取得は難しくない

――インドのビザについてちょっと説明していただけますか、取得方法やら注意点など。

豊島　インドの場合は観光ビザとエンメリービザですね。普通の観光ですと、トレッキングまで含めてツーリストビザでよい訳です。30日以内の滞在だったらノービザです。但し条件があり、6ケ月に1度しか適用されないことです。ということは、過去6ケ月のうちに1度入国していれば、たとえ1日でもビザを取得しなければなりません。

それからもう一つ、飛行機で入出国しなければなりません。

――観光ビザの取得するのにどの程度時間がかかるんですか。

豊島　取得は割と簡単で最低2日で取れます。但しシーズンによりますけど。

東京の人でしたら大使館，大阪の人でしたら神戸の領事館で取れます。申請に必要なものはパスポートと、写真が3枚です。写真はスピード写真で大丈夫です。それに往復の航空券、航空券がない場合はコンファーメーションスリップというものをエアラインで出してくれますので、それで良い訳です。片道の航空券きりない人は、800US$のトラベラーズチェックを提示することとなっています。

――観光ビザの延長はどうなんですか。

豊島　ええ延長はできます。ビザの有効期間の倍位は現地で申告すればできます。

観光ビザの最高は3ケ月ですが、さらに3ケ月延長できるかどうかはケース・バイ・ケースでなんとも言えません。

――ビザの延長は1回限りですか。

豊島　1回限りです。

――空路で入国する場合は30日間まではノービザな訳ですが、陸路の場合はどうなんですか。

豊島　陸路の場合は、必ずビザを取得しなければなりません。

――エントリー・ビザの場合はどうなんですか。

豊島　登山の場合ですとエントリー・ビザが必要ですね。この場合、ビザの前にＩＭＦの登山許可が必要です。ですから登山許可申請と同時に登山隊のビザを申請し、登山許可がおりると大使館の方に連絡が来てエントリー・ビザが取れる訳です。

――エントリー・ビザを取得するのに、以前は約3ケ月位必要だったんですが、今でもその位かかるんですか。

豊島　そうですね、今でもその位じゃないんですか。でも最近登山もトレッキングも制限地域が緩和されましたでしょう、ですから許可も割とスムーズに行くようにはなっているようですができるだけ早く申請なさった方が無難だと思います。

入域制限地域は３ケ所

――その他ビザを取る場合の注意点があったら。

豊島　特に注意点というのはありませんけど、インドの場合、制限地域というのがありまして、まったく入れない地域を除いて前もって許可を得なければならない地域が2,3あります。

――その制限地域とはどこですか。

豊島　シッキム，ベンガル湾にあるアンダマン諸島，アラビア海にあるラクシャティーブ、の3ケ所です。但しこれはあくまでも観光の場合で、登山の場合はまったく別です。

――まったく入れない地域は。

豊島　観光にしろ何にしろ、インナーラインとは関係なく国境周辺はダメです。パキスタン，チィベット，ビルマの国境周辺など。

――アッサムに入るのに許可はいらないんですか。

豊島　カジュランガへ行くのにカルカッタから指定されたルートに従って行く場合は許可はいりません。

指定されたルート以外や、1週間以上の滞在の場合は、カルカッタの州政府で許可を取る必要があります。

――シッキムの場合はどうなんですか。

豊島　観光の場合は4日間取れますが、その以上は無理です。トレッキングの場合は15日位かな。但し条件があり、グループでしかもリエゾン・オフィサーを付けなければなりません。

シッキムは、観光自体が許可が必要ですので、

トレッキングも限られた地域だけになります。

カルカッタはインドの縮図にあらず

——豊島さんは何度かインドに行かれている訳ですけど、非常におもしろいと思われた所、興味を持たれた所などお話していただけますか。

豊島　完全に個人的にでよいですか。

——はい、結構です。

豊島　かなり難しいですね。インドというのは日本の9倍から9倍半はあるという大きな国ですし、日本と違って多種民族があり言語も多くあってインドを成している訳ですので、風習文化も異なり、各々におもしろさが違うので、インドの良さを一言で説明するのは不可能に近いですね。

例えば、カルカッタがインドの縮図であるとか、ベナレスがそうであるとか言いますが、私は頷けません。人種から言語から様相までそれぞれの地方によって違う訳ですよね。ですからインドのおもしろさというのは1つとして同じ様相がないと言うことにつきると思います。

——推奨されるような所がありましたら。

豊島　インドに行くのに特別なルールも何もないのだから、来たから行かなきゃならないという事もないし、1ケ所しか行ってなくてそこしか好きでないと言う人もいますし、そこが好きだから何度も行くという人もいます。それはそれでいいと思います。

けれども、それはあくまでその人が行った時点で見たものだということをわきまえていれば、その人のインドというのは語れると思うし、どんな形で見ても、その人にとって興味のあるもの、場所であれば、その人のインドであると思います。

ＨＡＪさんの場合は、山関係が非常に多いので、本当なら山の方をお勧めすればいいんでしょうが、私はトレッキングというのは“山くずし”に行くものだと思っていますので。（笑）

——山と関係なくても結構ですから。

豊島　これから行って良く見てきたい所があるんですけどね。それはラジャスタンです。北西インドのパキスタンとの国境近くの砂漠地帯で、ジャイプールが州都の所です。

ジャイシャルメールとかラジプートなんかは、非常に勇敢な部族のいる所なんですが、ラジャスタンという名前はラジプートの国という意味らしいんです。勇猛果敢な部族の伝説があったり、それから何となく男性的ですよね。女性向きではないかも知れないけれど、いわゆる“ロマン”という言葉にふさわしい場所ですね。

——そうしますと、インドというのは非常に広大な地域ですし、それぞれの地域、地域にすばらしい魅力があり、インドを訪れる1人々にとってそれぞれのインドがあるという事ですね。

豊島　そうですね。それでいいんじゃないかと思いますね。

——最近、原点に帰ると言うか、神秘的な人間の生活と言ったような観点からインドが見直されているんではないでしょうか。

豊島　そうですね。そう言う事もあるし、やっぱりインドというのは不可解だから神秘だというような理解のされ方しかされていないと言いきっちゃっても良いかもね。一般的に言って。

だけど、行ってみると自分が哲学的な人間じゃないからかも知れないけど、別に神秘じゃないんですよね。あくまでも彼らの生活であるんですから、それが不可解だから神秘だというのはちょっと賛成できません。

ですからそういった特殊性に興味を持った人でなければ行けないとか、一般の方でも私はインド向きじゃないという人がいますけど、そうじゃないんですよね。ですけど残念ながらまだそういうのが強いですね。

——そうですね、インド興味を持っているのは特殊な人達だといわれますね。

豊島　そんな意味からも、インドは非常に広いし、あれだけの多様性を持っている国ですから、いろんな魅力があるし、やはり1度行ってみるということですね。

インドに行こうとされる方に対して、いろいろとアドバイスするのが私共の仕事ですから、どしどしご利用下さい。

——もっとお伺いしたい事もあるんですが、今日はお忙しいところ本当にありがとうございました。

（インタビュー　**松本正城**）

地域ニュース

《インド》

アッサムの政情不安

政情不安のアッサムに4月当初軍隊が派遣され4月7日インド政府は同州の基幹産業のストライキを禁止し、前々日の5日にはアッサムを「混乱地帯」(Troubled Area)と宣言した。一方学生の指導者はこれに従わず、4月7日ガウハティGauhatiの高等裁判所はアッサムに対するインド政府の「混乱地帯宣言」の一時停止を命じた。4月12日にはガンジー首相が現地で全アッサム学生連盟の指導者と会談したが、学生側は政府側の申し入れを拒否し、抵抗とインド各地への石油供給停止を続けると発表した。4月19日にはガウハティ近郊のナレンギNarengiの石油施設のピケットと機動隊が衝突した。4月17日のアッサム政府の発表によると、それ迄に100人以上の役人が学生運動に加担したかどで停職になり、更にその数は増加する由。同19日にはインド政府は軍政をしくことにした。石油関係労働者のストライキの結果アッサム州は石油不足となり、州政府は4月23日中央政府に対して石油の緊急供給を求めた。翌26日には石油施設にピケットをはろうとする者と警官が衝突し、多数の死傷者や逮捕者を出した。

(日印協会々報5月号から)

トピックス

映画「音楽の大陸—インド」「ゴーダマという男—仏陀の生涯」…日本映画研究所製作

6月23〜27日午後1時〜4時半　新宿・紀伊国屋ホールで上映。

「音楽の大陸」は上映時間90分。インド音楽の精髄をガンガの流れを背景に、素晴しいカメラワークで見せる。

「ゴータマという男」は、仏陀の生涯を追ってインドの農村、風物が紹介される。

照会先－日本映画研究会（03－461－5430）

新刊図書一覧

①黒田壽郎，「イスラームの心」，中央公論社，1980。4，208P，420円，（中公新書572）。

②溝上富夫，「Hindi（ヒンディー語）」，東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所，1980・2，43P，非売品，（アジアアフリカ文法便覧，No.13a）。

③種智院大学第一回ラダック調査団・編，「ラダック調査団報告書・第一回（1978）」，京都，種智院大学密教学会インド・チベット研究会，1979，106P，非売品。

④共同通信社。編，「シルクロードの旅——砂と緑と太陽と——」，共同通信社，1980・5，199P，3,700円。

⑤スウェン・ヘディン／文・画，ヨースタ・モンテル編，金子民雄・訳，「ヘディン素描画集」，白水社，1980。4，241P，6,800円。

⑥アリー・A・アル＝ダッファ著／武陽良一訳，「アラビアの数学——古代科学と近代科学のかけはし——」，サイエンス社，1980・3，132P，1,200円,(サイエンス叢書，N－4)。

⑦出海栄三，「山岳遭難の死角——続・死なないための発想転換入門——」，岳（ヌプリ）書房，1980。4，Viii，278P，1,400円。

⑧蛯原徳夫，「ロマン・ロランとタゴール」，第三文明社，1980・4，194P，480円，「レグルス文庫120）。

⑨ヴァールミーキ，岩本裕・訳，「ラーマーヤナ」平凡社，1980。4，Xii，350P，1,500円，（東洋文庫376。金七巻中第一巻）。

⑩季羨林，「罗摩衍那初探」，北京，外国文学出版社，1979・9，152P，0。37元＝190円，（初版5,000部）。（中国語版。内容＝ラーマーヤナ解説）。

⑪馮蒸，「国外西蔵研究概況（1949〜1978）」，

北京，中国社会科学出版社，1979・7，３８９Ｐ，1.２５元＝７５０円。（外国研究中国叢書。初版＝１３,５００部）。

⑫榎一雄・編，「敦煌の自然と現状」，大東出版社，1980。　，　　，Ａ５，6,０００円，（講座・敦煌，第一巻）。

⑬渡辺龍策，「万里の長城 ― 攻防戦史 ―」，秀英書房，1980・３，３０６Ｐ，1,４００円。

⑭藤江幾太郎，「藤江幾太郎 ― 山の画集 ―」，北荘画廊／製作，山と渓谷社／発売，1980・５，８８集，１６Ｐ，6,０００円。

⑮石川貞昭，「子連れ山旅日記」，山と渓谷社，1980・４，２５３Ｐ，８８０円。

⑯村井葵，「幻想ヒマラヤ」，中央公論社，1980・５，２４８Ｐ，３２０円，（中公文庫Ｍ１２５）。

⑰宮坂宥勝，「インド仏跡の旅」，人文書院，1980・５，２７９Ｐ，1,６００円。

⑱王重民・編，「敦煌古籍叙録」，北京，中華書局，1979・９，３８４Ｐ，1.４０元＝８４０円。（中国語。初版7,０００部）。

⑲≪沙俄侵略中国西北辺疆史≫編集組・編著，「沙俄侵略中国西北辺疆史」，北京，人民出版社，1979・12，４５６Ｐ，1.３５元＝８１０円，（中国語。初版１０,０００部）。

⑳千種義人，「オリエント」，文化総合出版，1980・２，１４６Ｐ，4,０００円。

㉑井筒俊彦，「イスラーム哲学の原像」，岩波書店，1980・５，２１０Ｐ，３２０円。（岩波新書－黄版－１１９）。

㉒真鍋俊照・前田常作，「インド・西チベット・ネパールの旅」，六興出版。1980・５，１９４Ｐ 1,９００円。

㉓野口冬人，「通いつめた我山々」，現代旅行研究所，1980・６，２７８Ｐ，1,６００円。

㉔斉藤吉史，「インドの現代思潮」，朝日新聞社 1980・５，２７３Ｐ＋Ｖ，1,６００円。

洋山岳書古書・新書 通信販売

○取扱書－世界全域山岳・探検・紀行・報告書。

◉探求書がございましたらお知らせ下さい。探します。

◉洋山岳書でご用済のものがありましたらお譲り下さい。誠実評価。

カタログご希望の方は、郵券¥200分同封ご請求下さい。

堀内章雄

〒151 東京都渋谷区代々木 1－21－9
登山とスキーの店山幸内
☎370－1100

ＨＡＪ事務局体制

○**職員**　松本正城氏　山森美智子氏が職員として勤務しています。事務局長の山森欣一氏は、現在カンチェンジュンガ偵察隊長としてネパールにおり６月に帰国します。帰国後は山森美智子氏と交代します。

○**執務時間**　月曜日～土曜日まで、午前10時から午後６時までオープンしております。

○**会議等での利用**　会員内外に会議室をオープンしています。利用の場合は事前に御連絡ください。なお、会員外の会議は有料です。

※場所

国電「高田馬場」駅、または、地下鉄東西線「高田馬場」駅から早稲田通りを徒歩７分、淀橋食糧ビル別館５階です。表通りに面してますが、「西村フトン店」という看板（右側）が目標になります。

どうぞ、気軽においでください。

その1

中国の山へのアプローチ

阿部　淳

北海道岳連が明春のコンガの準備を進めている。ことから、中国の山について書くことになったがこんな気の重いことはない。この広大な中国の、しかも未登峰や未知山域の多い地域を簡単にまとめて理解していただく知恵を持ち合わせていない。とりあえず、今後、中国の山の情報を得たいという人への参考資料を提供することにしたい。

(1) 解禁された山

中国の地図を拡げて見よう。北西部のタリム盆地の北側に天山山脈がある。その東端、ウルムチの東側に(新疆ウイグル自治区)現在解禁8峰(群)の最も低い1座がある。

- ポグダ峰　5,445 m (Bogda. 博格达山)
  旧名Bogdo Ola. 1948年シプトンが試登して以来の登山記録を知らない。

この盆地の西南面に長大な夢のクンルン山脈がある。西側はパミール高原の東端を形成している。

- コングール峰　7,719 m (旧Kongur－Ⅱ、公格爾山)　解禁峰唯一の未登高峰。我々の第一希望であったが許可は明年夏の英国隊、明年秋の京都カラコルムクラブに下りた。
- コングールチュビェ峰　7,595 m (Kongur Tubie. 公格爾九別山. 旧Kongur－Ⅰ)。
  '56中ソ合同隊初登、'61中国女性隊第2登。
- ムツターグアタ峰　7,546 m (Muztagata、慕士塔格山)'56中ソ合同隊初登、'59年中国男女混成隊第2登。

このコンロン山脈と大ヒマラヤ山脈に挟まれた地域がチベット自治区で高峰、未登峰の宝庫である。

- チョモランマ峰　8,848 m (Qomolangma. 珠穆朗瑪峰、別名Everest)
  今春日本山岳会ほか許可相次ぐ。
- シシャパンマ峰　8,012 m (Xixabangma. 希夏邦馬峰、別名Gosainthan)
  '64中国隊初登。今春西独隊、今秋オーストリア隊、明春日本女子登攀クラブに許可)

このチベット自治区の東側に二つの省が隣接している。その北側が青海省である。

- アムネマチン峰　7,160 m (Anyêmaqên. 阿尼瑪卿峰)
  '60中国隊初登。明春上越山岳協会に許可。

青海省の南に四川省がある。

- コンガ峰　7,590 m (Gongga. 貢嘎山、別名Minya GonKar)
  '32米国隊初登、'57年中国隊第2登。今秋米国隊、来春北海道岳連、来秋市川山岳会に許可。

以上でコンロン山脈の核心部とチベットの大部分を除いて、中国の高峰8座が解禁されたわけであるが、衛星峰 (sister perks) も許可されるのでその範囲に関心が持たれる。最近中国側の許可は早いので、外国隊をも含めて以上の外にも許可が与えられているものと思う。一説によると85年まで満杯ともいう。どの隊も初登外のルートを狙って偵察の準備を進めているので今後の展開が楽しみである。

（2）研究へのアプローチ

以上の8座は殆んどが既登峰であり、その概要を知ることは難しくない。邦文の文献として、深田久弥氏の「ヒマラヤの高峰」にすべて取上げられているし、その参考文献から和洋書の所在を知ることもできる。しかし新ルートをさぐる場合は、写真も乏しく、山岳地図も存在しないので厄介である。ましてヒマラヤ諸国の国境の山々や未踏峰など中国の山全体を知ろうとするとすぐ情報不足という障害に突き当たる。吉沢一郎氏の労作である高山表や概念図を見ても、チベット高原に十数座の7,000 m未登峰があり、ブータン国境にも同程度の7,000 m峰がある。そのほか無名峰も点在、6,000 m峰は知る術もないとなると興味は盡きないが、紹介された山はごく一部にすぎない。知ろうとするほど山は遠くなる。古い探検の歴史と原典入手の難しさ、山の存在確認すら容易でない広さと複雑さ、未解明地域の多さ、地図や写真などの情報の乏しさ、それに中国語地名の難しさなど障害に先を拒まれる。しかしそれだからこそ中国の山は魅力があるのだと言えよう。ここでは研究の導入部分を示しておきたい。

①どんな山があるか

- 現代アルピニズム講座別巻「海外登山と世界の山」（あかね書房　昭和44年）　吉沢一郎編『世界の山々』
- 「世界山岳百科辞典」(山と渓谷社　昭和46年)『海外主要山岳高度表』

この二程を補完させつつ中国の山をピックアップしてみる。未・既登の確認は、

- 「世界山岳百科辞典」吉沢一郎・中島寛編『ヒマラヤ登山史年表』
- 「ヒマラヤ、第三の極地」(白水社　昭和53年)『初登頂リスト』

が手近であろう。また中華人民共和国が誕生した1949年以降は、中国とソ連のみ、また1960年以降は中国だけの登山となる。その記録は、

- 「中国登山研究」（上越山岳協会　昭和50年）

にまとめられている。山の存在を知ったところでいかに未登峰が多いかを改めて知らせられる。

②どこにあるか

完全な山岳地図、分布図は乏しい。

- 「世界山岳百科典」（前掲）付録の「世界山岳地図」のうち、吉沢一郎氏作図『ヒマラヤ』『パミールとその周辺』

は唯一の山岳図（北東部は欠ける）と言えよう。さらに標高や地形を明らかに知るためにはつぎによるしかない。

- 米海洋測量局発行＜ＯＮＣ＞１／100万（Operational Navigation Chart）
- 米国参謀本部発行＜ＧＳＧＳ＞１／100万

いずれも山名は不明で標高もフィート標示なのでメートル換算が必要であるが、高度と位置を確認し地形概念とアプローチを知るのに都合がよい。

- 米国空軍（ＵＳＡＦ）発行のPilotage Chart １／50万には＜ＴＰＣ＞＜ＰＣ＞の二種ある。

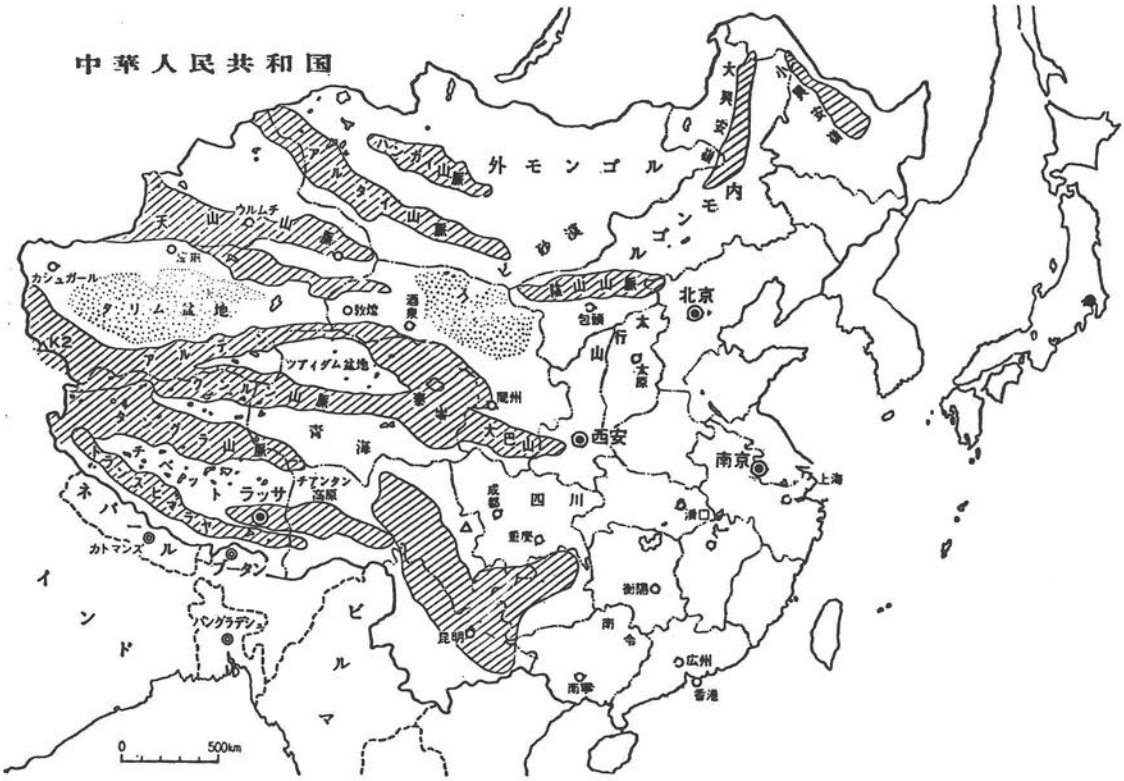
これも山名不明でフィート標示であり、アプローチの細部を知るには良いが大き過ぎて扱いづらい。とも角、地図による確認はこれしかない。

③どんな山なのか

順序が逆になったが、いよいよ探検・登山の人跡を辿り記録を調べる段階である。今回の許可峰とグルラ・マンダータ，クンルン，カイラス，ナラカンカールは「ヒマラヤの高峰」で記録の概要や文献を知ることができるし、ニェンチェン・タングラは中国隊の記録がある（もう一つ、スンヤトセンはソ連の記録）。それ以外は、探検家の記録を洗うしかない。まず概要を知る方が早い。

- 深田久弥「中央アジア探検史」（白水社　昭和46年）

は貴重であり、主要な探検家の概要が足跡図と共に描かれている。写真も楽しく、文献も貴重である。さてこの入口から奥に、ヘデイン中央アジア紀行全集（白水社）や西域探検紀行全集（同）をはじめとする莫大な紀行や自伝が待ち受けている。古い文献や原書は容易に手には入らない。著名な研究家や国会図書館にお世話になるしか方法はない。これらの記録から地域を知り、山の存在や様子をうかがうことになるが、それを先に挙げた地図で位置確認してはじめて山が明確になる。吉沢氏の概念図もこうして作成されたものであろうし、高山表のデュプレイ（Dupleix- Range）8,000 mも、双方のアプローチによる確信のもとに挙げら



れているものと思う。

④その他

中国の山脈または山の概要については

- ベースボールマガジン社「世界の山岳」（昭和54年」の『中国の山』（田山勝氏）
- 日本ヒマラヤ協会「中央アジア・シルクロード」（昭和52年）

が要を得ている。地理（含気象・風土）に関しては少なくないが。

- 帝国書院「中華人民共和国地図集」（昭54年）

は中国出版社による日本語版で詳しい。気象についてはアジア大陸、ヒマラヤ全般の中でとらえなければならない。以前に本誌で文献を紹介した記憶があるが、最近のものでは、

- 学研「世界山岳地図集成、ヒマラヤ篇」の『ヒマラヤの気象と氷河』（上田豊氏）

がある。広域気象を理解しつつ「アジアの気象」（古今書院　昭和36年）、理科年表（丸善）で月々気温と降水量を調べて先の地図集のデータと併せて分布図を描いてみるとよい。高山では降水量の他に融水を充分に考える必要があるから、登山記録に充分注意を払う必要がある。中国の山も特に注意したい。

写真は中国より幾つか提供されているが殆どが既登峰である。過去の探検家・登山家の撮した写真、カラコルムやネパール側から撮影した国境沿いの山や若干の空撮写真などに注目してよいが、これらも一部の地域に限られる。ともあれ今後が楽しみである。

（3）中国へのアプローチ

5月に発売された「岩と雪、75号」に中国登山レギュレーション全文が紹介された。これを前提として、わたし達の体験を綴ってみたい。

①申請から許可取得まで

私たちの場合は規則発表の前でもあり、現在とは若干の相異があるかも知れない。

- 54・5　日中友好の船訪日団長に依頼書提出
- 54・11　岩見沢市民友好団訪中の際、中国登山協会王秘書長に会見、計画書を提出する運びとなる。以上いずれも、日中友好協会道支部の仲介による。
- 54・12　登山計画概要を提出（希望三峰）
- 55・2　第2希望に許可して良い旨、通知。

• 55・4　正式申請書提出
• 55・5　議定書に調印

隊の許可に優先順位があるかどうかは不明であるが、“友好”と“熱意”は欠かせないと思う。

②許可峰について

解禁8座のうちの二峰に「およびその衛星峰」とあるが、他についても、その山の地図に記載されている山または標高標示のある山に許可を与えるというのでアプローチする価値はあろう。どの地図を指しているかは不明。また地図に記載された1ピークおよび頂上に至る1ルートについて、1登山料が必要であるが、それは他の隊にも許可を与える場合があるからとの理由である。つまり同時に他の隊にも異なったルートで許可することを意味すると見てよい。

③議定書調印

これを以って正式許可となる。これは単なる形式的調印ではなく詳細打ち合わせの場でもある。

隊の行動内容、双方の質問や要望事項についての質疑応答。輸送（日程、手段）や協力員必要数を含めて「経費徴収に関する暫定規定」に必要なすべての検討と費用計算。議定書および付属書(備忘録）に記載する事項の検討など、あらゆる事前打合わせをおこなう。先方は中国登山協会副主席史占春氏ほか秘書、通訳を含めて4,5名で、大変協力的友好的かつ紳士的におこなわれるという。記載事項についても決して一方的押しつけではなく双方が理解納得した上で決められる。

④規則について

基本的な原則は当然守らなければならない。しかし規定は、内容は厳しいがあくまでも規定であり原則であり“弾力的な運用”はあり得るという。実情にマッチしないこと、無理なことについては充分に配慮してくれる。例えば隊員の変更、費用の支払時期（分割）、ルートの偵察後の決定などこちらの要望を受け入れてくれている。

⑤費用について

中国登山は費用がかかるという声を聞く。それは経費規定にある通り事前支払費目が多いからでもある。また他の地域のように、協力員を省いたり、安い宿や露営を利用したり、輸送手段や食糧をネギったりできないからでもあろう。しかし中国の場合は“国家の名において責任をもって保証する”という立場から、交通手段、協力員（高所員から馬方まで）、宿舎などを完全に手配してくれる。これらのトラブルは一切起こりようがない。それに、中国の厳しい現状、登山隊への手厚い接遇、“請負い”として必要な人件費、国としての体面などを考えれば止むを得ないと言えよう。

なお交通手段などについても節約の方法も教えてくれ、予算立案の手助けもしてくれるという。コンガ峰の場合の経費規定の試算では、20人で約1,600万円、偵察隊4人で400万円であった。

⑥将来の解禁について

恐らく外国登山隊の安全も保証できることが大前提となろう。従って国境問題・軍事問題・不明の地域・交通輸送・宿泊施設などが検討され安全性が確保された山から解禁となる可能性がある。現在解禁されている山が既知の山であることもこれでうなづける。その点から推測すれば、アプローチに問題のない山、さらに友好国との国境上の山などが可能性があるのではなかろうか。夢のクンルン山脈も幻のデュプレイもまだまだ先のことかも知れない。（この項は、議定書調印に参加した友人からの情報をもとに私個人の立場で書いたことをお断りしておきます。）

（ＨＡＪ会員）

カンチェンジュンガ遠征隊募金について

1981年ＨＡＪが主催するカンチェンジュンガ遠征隊は、8,500 m三山を縦走すると言う空前絶後の計画です。ＨＡＪ会員の一人一人の皆様のご協力を是非お願い申し上げます。

≪募金要領≫

• 金額　1口　1万円
• 払込　日本ヒマラヤ協会（カンチ）

その2

魅惑のモンゴル

大崎　正信

（1）はじめに

今、モスクワオリンピックの参加、不参加が、問題視されている。ある人は、スポーツに政治や国家権力の介入は不当であるという。しかし、登山の世界に、その国の政情や国情が無関係であった例はあまりなく、常に海外登山はその影響を受けている。モンゴル登山も然りである。

「ヒマラヤ」の編集部より「モンゴル」についての案内か紹介を書いてほしいとの依頼を受け、困惑してしまった。出来れば、入国・入山方法と写真・地図も付記してほしいとの話しである。がそれらを一番入手したいと思っていたのが、私なのだから困るのが当然であろう。

一つの山が一段落し、次の夢は「ワハンの山」か「アンデス」か、あるいは「シルクロードの天山」か、それとも近くの「国後島の爺々岳」かと考えた末に、次の目標を「モンゴル・アルタイ山脈」に定め、仲間数人と月一回の集会をもち調べ始めたのではあるが、情報過多の他の山域とは違い、得たい情報や資料を思うように収集出来ないまま数年が経過している。やっと苦労し、見つけた資料も、戦前の内蒙古のもので、外蒙古、即ちモンゴル人民共和国を知るのに役立たずだったり地図も、モンゴル製のものは大縮尺で細部を知るには不都合であったりで、思うように事は運んでいない。

このような状態で「モンゴル紹介」を引き受けてしまうのは、象を見ず知らずして、象の絵を画いたり説明をするのと同じことに成りかねないのではあるが、その点、御容赦願いたい。

（2）モンゴルの魅力

私がモンゴルに引かれる所以（ゆえん）の一つは、まだ幾らかの地形的、文化人類学的魅力が残っているように思うからである。少ない資料手元にして、登山史や探検史を紐（ひも）解いてみても、日本人や西欧諸国の人々が、モンゴル国内を隈（くま）無く歩き、調査した記録は非常に少ない。戦前は、ソ連が、外蒙古を、日本及び、ヨーロッパ人が内蒙古を探検した記録が比較的多いのは、当時の国策の裏づけであろうか。

戦後、日本からモンゴル登山に許可を得た隊は、1968年の東京外語大のハルヒラー山群遠征が一度あったきりであるし、外国隊にしても、登山許可を得たのは、共産圏諸国のソ連や東独があるのみで、回数，地域も限られているようである。我々、外国人に未知なる地域や山が多く残っていることは魅力の一つではあるが、登山の面白さ、難しさについては、如何なるものであろうか。

魅力の二つめは、タクラマカン砂漠の向うに見える天山山脈のように、広大な砂漠や草原の彼方に浮かんで見えるであろう、アルタイ山脈に対する憧れとでもいおうか。日本人の知らない砂漠や、大草原に対するロマンが秘められているように思うからである。

又、個人的には、かつて、ソ連の調査隊や、米国のアンドリュース調査隊により発掘された中た

代の恐竜化石の発見に興味をもつ。ゴビ砂漠のような荒野の地に、かつて、中生代の頃、巨大な動物であった恐竜達が、住んでいた。その遥か昔の地史に対する興味があるわけである。

（3）モンゴル概説

さて、モンゴル人民共和国は、以前、外蒙古と呼ばれていた地域で、北部はソ連，東部と南部は中国内モンゴル自治区，西部は新疆ウイグル自治区と接している。国土は広い草原と砂漠と山岳部よりなる高原で、平均高度は1,600 mもある。

大陸性の気候を示し、年較差・日較差が大きく雨量も非常に少ない。

面積は、日本の約4倍（156万5,000 km^2）を有し、人口は約155万人、1平方キロに約1人という人口密度は、日本人にはうらやましい。ちなみに、日本人の人口密度は1平方キロに306人である。

住民の約9割はモンゴル民族で、容貌は日本人と良く似ている。ハルハ族（75%）が大半で、他に、カサブ族、ブリヤート族なども住んでいる。

言語はモンゴル文字をやめ、ロシア文字を使用している。

政体は、社会主義人民共和国で一院制。単一政党の制度をとり、議員は四年任期で選挙される。

行政上、18のアイマク（県）に分かれ、それぞれ中心都市が決められている。首都は、ウランバートル市で、以前は、ウルガ又は、イヘ・フレーとも呼ばれていたところで、知る人も多かろう。

農牧業が産業の中心であるが、革命後は工業の発展にも力を入れている。

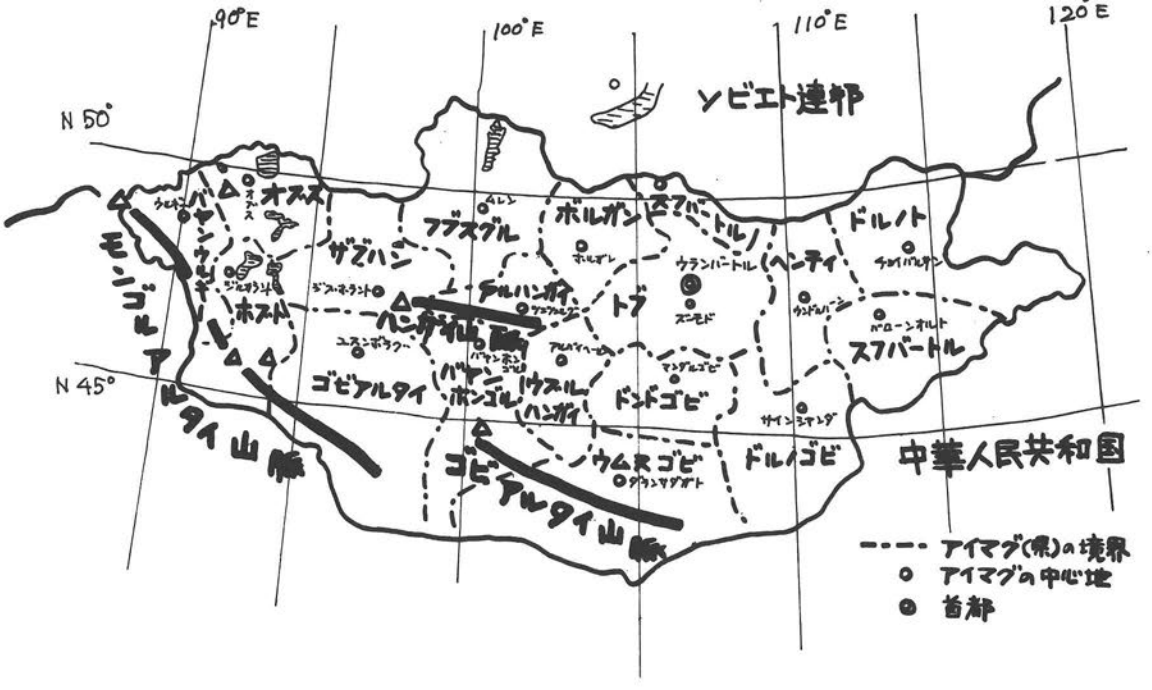
日本との国交樹立は1972年2月で、外交関係はまだ日が浅い。今後の友好を切望したい。

我々日本人は、戦前の特に革命以前のイメージでモンゴルを考えがちであるが、その後の変化は著しいようである。是非、自分の目で確かめて見たいものである。

（4）モンゴルの山々

モンゴルの主な山脈の第1は、西端より東に延びる長大な山脈『モンゴル・アルタイ山脈』を上げねばなるまい。バヤンウルギー県，ホブト県，ゴビアルタイ県の三県にまたがっており、幾つかの山群に分けて見ることが出来る。最高峰は、西

モンゴルのアイマグ（県）と中心地



端にあるダボンボクト〔旧名：フィティン・オラ〕（4,653 m）で1948年にソ連・モンゴル合同隊により初登頂され、1959年に同じくソ連・モンゴル合同隊により、第二隊がなされている。

西端のバヤンウルギー県の中には、他に、ムスト山（3,934 m），バヤン山（3,477 m）の他、3,800 m前後の山が、まだ幾つかある。

ホブト県の中には、4,000 m峰のムンフハイルハン（4,231 m），ソタイ（4,226 m）の二座があり、ジルカラントハイルハン（3,589 m），バートルハイルハン（3,575 m），ウムヌハイルハン（3,552 m），ハイダボクト（3,326 m）の他、3,000 m峰が、数座あるようである。ソタイとムンフハイルハンには、それぞれ1975年と1976年頃、モンゴル女性隊が登っていると聞く。

ゴビアルタイ県には、ダヤン（3,767 m），アジボクト（3,767 m），ハサクトハイルハン（3,582m），ブスハイルハン（3,392 m），ハルアズラガ（3,144 m），ポーラルハイルハン（3,209 m），タイシラ（3,031 m）などあり、他にも3,000 m級の山が、幾つかある。

以上が、モンゴルアルタイ山脈の山である。

主なる山脈の第二は、モンゴルアルタイ山脈に続く、東半分『ゴビアルタイ山脈』である。バヤンホンゴル県から、ウムヌゴビ県にまたがる山脈で、東部へ行く程低くなりゴビ砂漠に消えて行く。

ここの最高峰は、西端のイフボクト（4,000 m）で、3,000 m級の山は、バガボクト（3,587 m），バヤンツアガン（3,462 m）などがあるが、大半は、2,500 m以下のものが多い。

2,500 mといっても、この内陸の地、モンゴルは、平均高度が1,600 mという高原地域であるから、2,500 m以下の山は、丘のようなものになり、登山対象の山としての興味は薄れる。

主なる山脈の第三は、モンゴル中央部、ザブハン県より東部に延びる『ハンガイ山脈』である。

最高峰は、オトゴンテングリ（4,031 m）で1976年にモンゴルの女性隊が登頂している。国境の山ではないので、他にも、登頂記録があると思われる。ここには、他に、ツアガンハイルハン（3,363 m），ソブラングハイルハン（3,200 m）など、3,000 mの山が、幾つかある。

他に、山脈というより山群として扱った方が良いと思うが、モンゴル西方でモンゴルアルタイ山脈北側にあるオブス県の『ハルヒラー山群』がある。ハルヒラー主峰（4,116 m），Ⅱ峰（3,990 m），Ⅲ峰（3,840 m），Ⅳ峰（3,550 m），Ⅴ峰（3,680 m），Ⅵ峰（？）があり、Ⅵ峰を除き、すべて、1968年に東京外語大とモンゴル合同隊が登頂している。特に、Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ峰は初登頂で、主峰は、1959年のモンゴル隊に続く、第二登である。又、この山群中のトウルゲンⅠ峰（3,917 m）は、1965年に東独・モンゴル合同隊により初登頂されている。

以上が、モンゴルの山の概略であるが、何といっても、登山の対象として面白そうなのは、4,000 m峰以上の6座と、モンゴルアルタイ山脈の西部になろうかと思う。地形や登山史の詳細については、不明な点も多いので、今後の課題としておきたい。

（5）観光・旅行ルート

私のように、登山を目的に入国許可を考えている人は多いが、今の所、それは難しい。かつての東京外語大は、ハルヒラー遠征に10年の歳月を必要とし、いざ出発の直前に不許可の知らせが届き、大さわぎをしたそうである。1972年の国交樹立後の今は、特定地域の観光旅行であれば、入国は可能であるが、まだ、自由にどの地域にでも出入り出来るわけではない。

入国ルートには、次の四つの方法がある。

①空路で：成田→モスクワ→イルクーツク→ウランバートル

②空路で：羽田→新潟→ハバロフスク→イルクーツク→ウランバートル

③船と鉄道で：横浜船→ナホトカ汽→ウラン・ウデ汽→ウランバートル

④空路と鉄道で：成田空→北京汽→ウランバートル

このうち②が旅程も１～２泊と短かく、経費も割に安いようである。

日本の旅行業者では、「日本交通公社」と「トラベル・センター・オブ・ジャパン」の二社が、取り扱っているようである。

又、モンゴル側では、外国貿易省の管轄下にある「ショールチン」という事務局が、観光客に関する業務を担当しているという。

住所は " Zhuulchin " Hotel Ulanbator
Ulanbator City,
Mongolian People's Republic

以上、今回は、概説的な説明で筆を置く。誤記もあるかも知れないが、"はじめに"述べたようにお許し願いたい。読者諸氏の御指導を願う次第である。

（ＨＡＪ会員）

６月定例集会

下記のとおり開催いたします。

- 日時　６月30日（月）午後６：30～８：30
- 場所　ＨＡＪルーム　（高田馬場）
- 講師　堀内　立三氏
  小林　英見氏
- 内容　スライドを交じえて「花の谷、ランタンを訪ねて」の話をお伺いいたします。
- 会費　100円（コーヒー代）

※　出席者は事前に電話をください。

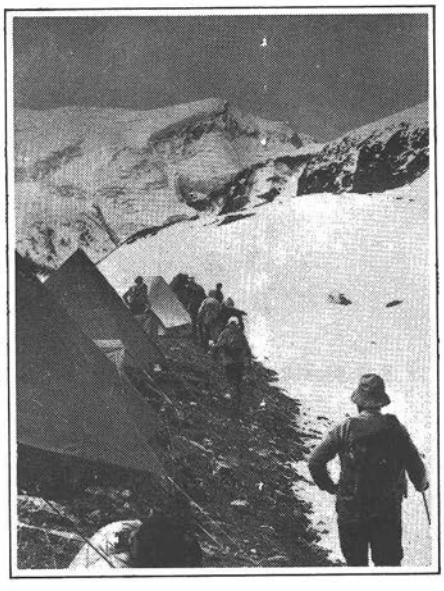
Shikhar Travels

―― シカール・トラベル ――

〝魅惑の
インド・ヒマラヤ〟

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・・

へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



Shikhar TRAVELS PRIVATE LIMITED
1701, Nirmal towers
barakhamba road new delhi-110001
tel. 42555, 42666 telex 031-3972 JCIIN cable SHIKHE
Branch office: Gangtock
Camp office: Joshimath & Uttarkashi

予　告　第4回日本ヒマラヤ会議

仙台　7月6日（日）

54年度から、本会主催、日山協後援のもとと開始した日本ヒマラヤ会議は、本年度仙台を皮切りに各地で開催いたします。

御承知のようにこの会議は、ヒマラヤに関心を持つ者であれば誰方でも参加できるものです。

仙台会場については、特に東日本地区の方々の参加を期待いたします。

≪趣旨≫ ヒマラヤにおける高所登山とその周辺に関して多角的に考究し、その健全な発展をはかることを目的として、この分野に関心を寄せるすべての人々に向けて開催する。

≪期日≫ 昭和55年7月6日（日）

≪場所≫ 仙台共済会館
仙台市錦町1－8－17

≪主催≫ 日本ヒマラヤ協会

≪後援≫ 日本山岳協会

≪日程≫

8：30～9：20	受付
9：30	開会
9：45～12：00	カンチェンジュンガからの報告　東ネール・ヒマラヤ事情と試登の記録。
12：00～12：45	昼食
12：45～13：45	＜研究＞高所登山の装備・食糧
13：45～15：15	トレッキングで登れる山をめぐる諸問題。（ネパール他，許可，技術，高度順化，事故と解折他）
15：30～16：30	特別地域とその入域，登山へのアプローチ
16：30	閉会

≪参加≫ この会議の趣旨に関心を有する者で、所属，経験等を問わない。（50名）

- 参加費：2,500円（資料代他）
- 申込み：昭和55年6月25日まで下記に申込みのこと。（期日厳守）

※ハガキに「日本ヒマラヤ会議参加申込書」と明記し、郵便番号，住所，電話，氏名，年令性別，海外経験，計画を記して下記またはＨＡＪ事務局へ。

≪その他≫

1）講師はＨＡＪ内および日山協海外委員会の協力を待て精通者を配置します。

2）当日、報告書他，資料の領布をいたします。

「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より広募したものを、毎月一作づつ掲載する予定であります。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

≪規　定≫

(1)モノクロでキャビネ判以上であること。

(2)被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。

(3)未発表であること。

(4)なるべくあまり知られていない角度からの写真、あるいは未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見うけられるような写真（例：カラパタからのエベレスト）などは御遠慮下さい。

予　告　ＩＭＦ総裁Ｈ・Ｃ・サリーン氏を向えて
インド・ヒマラヤ研究集会を開催

先月号で予告したように、インド登山財団総裁H.C.サリーン氏を迎えて下記の日程によりインド・ヒマラヤ研究会を各地で開催することになりました。

当初、７月来日の予定でありましたが、政府の仕事の関係で延期したものです。

研究会の内容は次のように予定しています。会場・時間・内容等の詳しいことは追って会報に発表いたしますので御期待ください。

記

1. 開催期日
   - ８月26日(火)　新東京国際空港着。ＨＡＪ主催による公式レセプション。
   - ８月27日(水)　研究会（札幌）
   - ８月28日(木)　研究会（京都）
   - ８月29日(金)　観光・他
   - ８月30日(土)　研究会（名古屋）
   - ８月31日(日)　研究会（東京）
   - ９月１日(月)　観光・他
   - ９月２日(火)　ＨＡＪ主催サヨナラ・パーティ
   - ９月３日(水)　離国　インドへ
2. 内　容
   - ＩＭＦからのメッセージ　…サリーン氏
   - インド登山事情（登山界・歴史・登山教育・入域事情・他）　…サリーン氏
   - 質疑　ＩＭＦに望むこと。ＩＭＦから日本の登山者に望むこと。
   - 映画（スライド）
   - 懇談会（サリーン氏を囲んで）

藤江幾太郎　大ネパール展
７月１日(火)～７日(月)：東京

本会々員（監事）の藤江画伯がネパールを描きつづけて12年、その成果を一堂にあつめた個展が開催されます。

山と渓谷社から画伯の「山の画集」が発刊され、また、画伯の還暦にもあたる記念すべき年にあたり、本会はネパール大使館、他とともに個展に協賛することになりました。ぜひ、多数の会員各位の御観覧をお願いいたします。

協　賛

ネパール大使館
日本ネパール協会
日本ヒマラヤ協会

後　援

おいらく山岳会

- 時・７月１日(火)～７日(月)
- 所・銀座アートホール
  銀座８－110コリドー街、

1968年ヒマラヤ協会の第１回例会に参加して初めてネパールを訪れ、ヒマラヤの壮大鮮列な山岳美、全都が美術館ともいえるカトマンズ盆地の古都、淳朴な人情はタイムトンネルを何10年も潜り抜けたような錯覚を起こさせる素晴らしいものでした。私はネパールの虜になったのです。71年には家内を伴い、72年にはエベレストの見えるシャンボチエに、75年にゴラパニ、77～８年には80日間の取材旅行で、お釈迦さまの出生の地ルンビニ、居城跡カピラを訪れました。この５回何時でもポカラのアムリッセルチャン宅に泊めて貰いました。従って私の制作の多くはここが基地になっています。

昭和44年、第45回白日展（都美術館）にネパール風景(A)、(B)、(C)の３点（各60号）を出品したのを皮切りに、以降毎年白日展にはネパールの作品を出品しました。（120 ～50号）今年で12年続き、総点数は大作17点となりました。これ等の作品を中心にして回顧展を企画した次第です。

これ等の作品はネパールによって育くまれかもし造られたものです。この展覧会を一層意義あらしめる為、チャリティーコーナーを会場内に作り、皆さんのご協力をお願いしたいと存じて居ります。

（藤江幾太郎）

カンチ通信 No.4

4月1日ラムゼーにて

3月24日　昨夕のヒョウが嘘のように晴れ上がった中を2時間８００ｍ下って更に７５０ｍ登ってキャンプ地着。

3月25日　7時すぎにはほとんどのポーターが出発。1時間半で1,780ｍのプンプン峠に立ちました。ここからは真正面にカンチ山群が見えます。上部は全く雪を付けていず、ものすごい迫力です。今日はキャンプ地の決定で行き違いがあり、少しでも先に伸ばそうとする隊員側と前例に従おうとするポーター側との争いになります。この街道は比較的歩き易いため隊員の足で1時間先に伸ばすとポーターの着くのが4～6時になってしまいます。

3月26日　待望のヤンポディンに到着しました。最奥の部落です。ここでポーター入れ替えのため一日停滞です。標高1,650ｍ。戸数約40戸。

3月27日　ナイケの給料の件で話し合い。結局ここでナイケも代わるため、ダーラン・バザールから来た2人のナイケに25RS/日給料を支払う。リエゾンオフィサーは、ここに泊りたい。上には行けないと言うので食糧等を渡す。今日の情報では一日前まで西独隊が追いかけて来ていると言う。ここで雇うポーターも、この西独隊の手が廻っているのが多く優秀なのは集まらないと言う。

3月28日　8時半出発。いきなりの急登を800ｍ2時間半で登ると峠着。いよいよ山らしくなって来ました。しかし峠から２００ｍ下って今日は早々とキャンプ地に着きました。この辺がこちらのペースのようです。

3月29日　7時前には全ポーターが出発。3時間の急登でラミテの峠着（3,250ｍ）ここまでに竹林が続き、その中にスミレに似た紫の小さな花が咲き乱れていました。又、真紅の地に白や、ピンクのラリグラスもありました。3,000ｍに近くなるとさすがにラリグラスの樹も日本のシャクナゲのように細くなって来ました。ラミテの峠から２００ｍほど登り北面側に下り始めると残雪が3,000ｍラインまでありました。シンブーコーラに降りて右岸に渡った所がキャンプ地です。この日行程が長すぎたようです。そして洸々とした月夜が夜半12時頃より大雨となりました。

3月30日　昨夜の雨と昨日の行程で遂にポーターストです。しかし菊地のネパール語による説得でようやく解決。シンブー河の右岸沿いの道を5時間半でようやく「ツエラム」に到着しました。しかし、喜んだのも束の間で3時頃より5時間雪となり、草原も一変して冬山と変わりました。

3月31日　一面の銀世界。ポーターは停滞とし隊員6名とシェルパ1名で「ラムゼー」までトレスして来ました。

4月1日　キャラバン20日目にして、ようやく「ラムゼー」に着きました。カブルーやラトン・ピークのほぼ真下の対岸になります。ポーター賃金の支払いで一もめしましたが、ここで80名のポーターを全員解雇し、いよいよ、隊員、シェルパとカトマンズから連れて来た、キッチンポーターで3日先のＢ．Ｃまでピストン輸送になります。このラムゼーには、先行したメキシコ隊の荷が少し残っています。次回はベース・キャンプより隊員の紹介を行います。ここラムゼーからは、まだカンチは見えません。

雪降るラムゼー（4,300ｍ）より（山森・記）

1980. 4. 16　B.C（ヤルン氷河5,000ｍ）にて
前列左より角田・八嶋・山森・菊地
後列左より若尾・片岡・山田

カンチ通信 No. 5　　4月16日B.Cにて

4月15日　待望のベースキャンプ入りを果たしました。とは言っても隊荷のほとんどは、まだヤルン氷河の中流にあります。前便を書いた後、残ったポーター13人の内7人が賃金の不満からメキシコ隊に逃げてしまい我々のポーターは6人となりこれも薪切り用のため荷上げには使えません。

ヤルン氷河上に設けた「トランスポートキャンプ」「デポ地」と2ケ所への荷上げは14人の隊員とシェルパで行いました。1日平均300kgの荷が上がりますが、総隊荷2.5tをデポ地（4,900m）まで集結するのに2週間かかった訳です。

この間、メキシコ隊はB. Cから上にルートを伸ばし、西独隊（西独、オーストリア、スイス、ポーランド）は我々に追いついて来ました。この狭いヤルン氷河の中で3隊が競い合っている状態です。とにも角にもダーラン・バザールを出発して34日目にしてカンチ西壁の真下5,000mにB.Cを設けた訳です。恐しい所です。

さて、その34日のキャラバンを耐え抜いた我隊のメンバーを隊長の独善と偏見で紹介しましょう。

①片岡邦夫（26）渾名：上人：一度はカンチを諦めて高知の田舎へ帰える予定であったが、去年所属する法大のルプガールサール遠征（隊は成功したが本人は登頂できなかった。）の後、インド放浪の旅の折、煩悩の多くを解消しネパール入りし、急拠偵察、本隊に参加することになった。最年少隊員らしく良く喰い良く運ぶ。別名コキの片岡。

②角田不二（27）渾名：編集長：ご存知「ヒマラヤ」編集長。若い頃ネパールを彷廻したのが病みつきとなりカンチ計画に参加。トレーニングで参加した'78HAJ登山学校では、急逝した登攀隊長の代役を努め隊を成功に導いた。一見老成している印象ながら若さを露見しやすいところが魅力となっている。'81ポストにガンガプルナの計画をもっている。別名ヤルン氷河香りの角田。

③八嶋寛（30）渾名：ヤシマカン：'75アンナプルナS。'78にはHAJの2つの登山学校（ヌンとトリスル）に参加した豪の者。山以外にはあまり興味を持たないと思われていたが、このヤルン谷に入ってから詩人となり、皆の語録について詩的評点をつけるようになった。帰国したら何やらありそうな雰囲気を漂よわせている。隊一の早足と、早寝、早起き。（宮城）

④山田昇（30）渾名：デカ長：'75カラコルム彷徨の旅を経て、'78ポストにはダウラギリIのサミッターになった。繊細なのか豪腹なのかとらえどころがないが、外人との会話の中で時折り「ホイナ」と口をついて出るなど、まだまだヒマラヤ登山とは縁が切れそうにもない男。（群馬）

⑤若尾巻広（30）渾名：原人：悪名高いカンチェンジュンガベースキャンプまで長靴で通し、現地ポーターを呆然とさせた。年の割には良く食べ、飲むので一目置かれている。ヒマラヤ登山は今回が初めて。（長野）別名さわりの若尾

⑥菊地薫（34）渾名：パラリンピッカー：ネパール滞在が長く、カンチ計画を支えて来た。今回は、5年振りの本格的な登山となったが、長年蓄積して来た経験と現地生活に慣れ親しんだ身体とを駆使して、偵察隊をリードして来た。ベースキャンプまでギターを持参しなかったことを後悔している。（宮城）

⑦山森欣一（36）経験者ばかりの隊をまとめる、幸運な男。過去2回の遠征のいづれにも失敗し、偵察ながら今回は成功させたいと思っている。唯一の妻子ある身。（東京）

以上簡単に紹介を終わります。

さて、本番の縦走ですが、7人全員が困難ではありますが充分可能性があると観察しています。西独隊のヘルリヒッコファ隊長も我々の来年の縦走計画に多大の関心を寄せ「成功を祈る」旨メッセージがありました。

残された短い日数で偵察活動を行い成果を持ち帰えりたいものです。

雪崩の音が絶えないB.Cより（山森・記）

遠征学入門

XIX

実践編

隊の構成と運営

清水　澄

前２回では、隊の組織にとっては結局は個人が大切であることを述べた。今回はそれに基づいて隊を動かす具体策にふれてみたい。

その前に話は変るが現在、特別事業委員会が派遣しているカンチェンジュンガ縦走の偵察隊のことを少しだけ書こう。偵察隊はヤルン氷河をつめて活動中であり、メキシコ，西独の２つの登山隊とも良好な関係を保ちながら、偵察行動を行っている。カンチェンジュンガ南峰→中央峰→主峰の縦走は充分可能性があると云って来ている。出来ることなら8,200 *m* まで登って更に詳しくルートの状況を調べる筈である。この偵察隊及び明年の本隊は、目的の達成は勿論であるが、ＥＸＰ研が追い求めるより良い遠征の研究実践の一環としても、重要な意義を持っている。偵察隊は非常に有機的に且つチームワークよろしく運営されているし、現地からの報告は直ちに本隊の準備活動に生かされている。これは構成員個々の秀れた能力ということよりも、理念と目的意識が確立されているからこそ出来ることであろう。本篇で筆者が著わすことは、カンチェンジュンガ隊に於けるものの確認でもありたいと願っている。

隊の役務構成について

ここでは隊の構成員である個々が受けもつ役割（隊務分担）について考えてみたい。個々の役割が重要なことは前回にも述べた。そこで役務名だけでは内容のはっきりしない役割について、その性格とか考え方を明らかにしたいと思う。

総隊長　遠征隊がどのような分野を目ざすものであろうと、最高責任者は隊長である。その隊長の上に、わざわざ総の字をつけた隊長（或いは隊によってはそれでも足りなくて総指揮などを置く場合もある）を置くのは主として大きな組織の派遣母体、又は壮大な規模の遠征隊の場合に多い。この場合の総隊長、又は総指揮の役目は、隊内外の鎮めとかスポンサー対策などであり、隊の実務指揮はとらないのが普通である。つまりステイタス・シンボルという訳である。ただし規模の大きな探検隊などで、いくつかの支隊が出る場合は、話は違う。

登攀隊長　登山隊では登攀隊長を置くことがある。登攀に限らず、隊の運営，進行の総てを受け持つのが普通である。やはり規模の大きな隊に置く場合が多い。隊長はステイタス・シンボルとなるか、対外的な渉外や雑務を行う。しかし総隊長などは完全にステイタス・シンボルであるのに対し、この場合の隊長は幾分か隊務に係わる余地を残している。こうなるとリーダー・シップは少々面倒なことになるが、直接の指揮権は現場監督とも云うべき登攀隊長に任されるのがよい。

企画　最近こんな名目の役割を見かけるようになった。企画は派遣母体を含めた総体でのものであろうが、隊員中で隊長，副隊長に代って中心となって推進して行く人に与えられることもある。種々雑多な隊務の発案，処理を司どると考えればよいであろう。勿論、隊長の補佐役であり、遠征のデザインを１人でどうこうするという役目ではないことを心得るべきである。

戦術　隊に於ける戦術は指揮者が考えているべきものである。またその指揮者に影響を与えるよ

うな大筋でのタクティックスは、総体で研究を行って来ている筈である。更にその根本は、遠征のデザインということになろう。それなのに敢えて戦術などという係を置くのは、隊員数に余裕があり、隊の規模も大きくて、隊長が多忙を極める場合である。隊の現状把握のための物資の残量、荷上げの状況、隊員の健康状態とローテーション、ルートと気象の状況などを統計し、隊長の指揮、命令に資する。また細部でのタクティックスに関し、相談のあった場合はそれに応ずる。あくまでも補佐の任であり、この役務が隊の戦術を切り盛りするものと考えてはならない。

登攀リーダー　これも最近の組織的な隊でよく聞くようになった。考えてみるとこの言葉自体不思議な合成語だが、任務もまたはっきりしない。勿論、登攀隊長と同義ではないし、戦術担当とも明らかに違う。一線にあって、ルート工作などを行う数人のグループとかパーティのリーダーという程の意味で、行動中の現場判断とか統制を任された人と考えればよいであろう。普通複数の登攀リーダーがいて、彼ら現場のナマの意見は隊長(又は登攀隊長）の細かな戦術の決定と指揮の上に、大きな影響力を与えるが、その肩の荷を軽減するという性格の役務でもあると思える。

荷上げ管理　隊によって与える名称は多少異なるが、こういった役務を置く隊もある。またこの役務を置かない隊では、隊長，副隊長，登攀隊長，装備係又はその他がきちんとこの役目を果していなくてはならない。上部キャンプに上げるべき物資のアレンジ、各キャンプの在庫量と消費量、総体での残量などを常に適確に把握していて、補給線に切れ目を生じないように務めると共に、アタック時期とか遠征期間延長の可否などの決定に資する。更に必要であれば麓の街からの補給も行う。遠征は補給なりと言われるように、この役務は隊の死線を制するものである。

この他にも数々の役割があるが、それらは比較的内容もはっきりしていると思う。いづれも要は各係が有機的に連係を保つことであるし、いざとなったらとって代われるように研究し、精通しているべきである。

隊の運営基本

隊を運営して行く上で大切なことは、それぞれの役務の分野はその係に任せることである。無関心というではなく、仕事の内容や進行の度合いはよく理解した上で、それぞれの持場を尊重する態度が必要であろう。勿論、隊総体としてのバランスは重要であり、常に理念，デザイン，予算などにフィード・バックさせて処置を行うべきである。

よい運営はよいチーム・ワークで果されるのは当然であり、そこにお互いの人間性を理解し、心を許し合っておく関係が大切となる。このことは隊組織の項でふれたので重複はさける。

さて隊の命運を左右する程の重大な局面で、どのような決定のし方をするかは、大きな問題である。1975年のＨＡＪガルワール隊でのこと。憧れのナンダ・デヴィ内院へはやって来たが、登山許可はチャンガバン。しかし全隊員の心はウッタルリシ氷河の奥の山々に執着している。日本国内では、内院入りに際して先発隊がチャンガバンをチョコチョコッと偵察し、登攀不可能という結論を出して、我らの目標の山々へ転進しようという統一。言わば欺瞞作戦であり、リエゾン・オフィサー対策は隊長一任。現地に来てみるとリエゾンは非常な人格者で、遠征隊はチャンガバンに登るものと信じきって、誠心誠意尽してくれている。その心に打たれて自分に恥じ、転進はチャンガバン登攀後でもよいではないかと心の中。しかし初志貫徹を主張する隊員も多く、ケンケンガクガクの論議。国内での方針を盾にとる者，チャンガバンの登攀方法を盾にとる者，登山期間の不足を危惧する者等々。リエゾン側に立つ者もない訳ではないが、大勢は即転進論。隊長の決定には従うとはいうものの、なるべくなら我が意の方にと圧力をかけるのである。転進を願い出る心の中で、リエゾンに当方のさもしい心を見透かされたようで心の痛んだこと。

あんな山中まで行ってこれだけの思い切った議論をしても崩れなかったチーム・ワークを評価するか、隊長への信頼が足りなかったのか、それ程の論議をさせた運営方針がまづかったのか、読者はどう考えられるだろうか。

花を求めて（2）

水野　勉

美しい花の物語をするのにまことに無粋なことに、政治の話からとりかかることにする。

18世紀、19世紀にヨーロッパ、アメリカへ茶が輸出されていた。輸出国はいわずとしれた中国である。買手はイギリスであり、その茶貿易を一手に引受けていたのがイギリス東インド会社である。18世紀にはまだまだ高価だった茶も19世紀に入ると量も増え、大衆の口に入るようになった。

この茶の代金の支払いは銀である。イギリスの商船は茶を積んで西へ向い、銀魂を積んで東へ向った。茶の需要が高まるにつれ、銀の流出量も多くなる。銀の代りに、中国へ何か商品を売りたいが、うまい商品がみつからない。

そこで開発された商品が、インドで栽培されたアヘンであった。このアヘンもイギリス東インド会社の独占であった。専売制になったのも1773年である。18世紀末には茶の輸出が急激に伸び、それにつれて、アヘンの中国への輸出も急激に伸びていった。

1834年には、イギリス東インド会社の独占がくずれたが、イギリスが茶とアヘンの貿易を握っていたのは事実である。ここで1838年には、中国はアヘンの輸入増大に怒って、すべての外国との貿易を禁止し、イギリス側が保有していたすべてのアヘンを押収した。イギリス側は譲歩し、3万箱を引渡して、棄却したが、中国側は承知しなかった。そこで1840年ついにイギリスは宣戦した。これがアヘン戦争である。

1841年5月には広東が占領され、1842年6月には上海が占領され、8月には軍艦が南京に迫った。ここで講和が成り、ホンコン島の事実上の割譲および厦門，福州，寧波，上海の四つの港をイギリス貿易港として追加開港することが定められた。かくて，奥地へ入ることはまだ外国人には禁ぜられていたが、広東以外に四港が開かれた結果、イギリス人はこの五港から50マイルくらいまではなんとか入ることができるようになった。

1842年の南京条約の結果に、イギリスの園芸協会は中国へ入るチャンスを得て、急激に活動を開始した。そのとき協会の指導的地位にいたジョン・リーヴスは中国コミティーを組織し、植物採集者を派遣することに定めた。えらばれたのが、ロバート・フォーチューンである。

かれは1812年に生まれ、1839年にはエディバラの王立植物園に入り、有名なウィリヤム・マクナブのきびしい指導を受けた。かれは中国において植物採集に従事するようにえらばれたが、かれの極東における旅行は19年間にも及んだ。

かれはその旅行に関する四冊の本を書いている。

Three Years Wanderings in the Northern Provinces of China (1847)；A Journey to Tea Countries of China (1852)；A Resisence Among the Chinese (1857)；Yedo and Peking (1863) また 1849年以後に発行された。Gardeners' Chronile 誌や the Journal of the Royal Horticaltural Society 誌上に数多く寄稿した。

かれが発表した文章は非個性的なもので、その文章からかれの性格を知ることは極めてむずかしい。かれの著作がその重要性の割に人気がないのも、あまりにもフォーチューンという人間が読者にとって冷淡すぎるからであろう。かれはつねに熱心に手紙を書き、ノートをとり、日記をつけていたが、その大部分はかれの死とともにその家族によって処分されてしまった。じつに残念である。これらのノートや手紙や日記が残っていたら、かれの業績はもっと高く評価されたかもしれない。

1843年2月26日にかれは船エム号に乗って出発

したが、その三日前にかれは園芸協会からの長い指示書をうけとっていた。この指示書は非常に興味あるもので、ここに全部を紹介したいくらいだが、それではこの項がいつになったら終るかわからない。しかし、省略するわけにもいかない。要点だけを記してみる。

出発して帰るまで、年俸100ポンドとする。

派遣の主たる目的は、英国内でまだ栽培されていない品種のうち、美しい植物あるいは有用な植物の種子および標本を採集すること、中国の園芸および農業に関する情報と併せて気候の性格と植生に与えるその影響に関する情報を得ることの二つである。

これらの目的のために、行動のすべてを詳細な日誌につけること、観察したこと、それに関する意見などを毎日ノートすること。これは後になって遠征記録が他の会員のためにまとめられるとき、その資料となるのである。

あらゆる機会を利用して、家に手紙を書き、それらには連続番号を付すること。日誌の中に取り入れた資料を出来るだけ多く、手紙の中に具体的に書き入れること。こうすれば、協会は遠征の経過を判断し得る。すべての手紙は正副二通作り、別々に送ること。僻遠の地からの通信にはアクシデントが起きやすいからである。

その他、じつにこまごまとしたことまで指示している。これによると、中国の膨大な植生について殆んど知っていないことがわかる。この委員会は、その当時のヨーロッパにおいては、もっとも中国の園芸についての権威ある人々によって構成されているのにかかわらずであった。フォーチューンをはなれて考えても、この指示書はじつに興味ある、重要な書類である。

ロバート・フォーチューンはたしかに植生における傑出した植物採集者であった。かれはつねに冷静で、いかなる苦難にもゆるぎもしなかった。性格的にいって、ユーモアなどひとかけらも持ち合せていなかった。その代りに、かれは虚栄心も持っていなかった。かれの著作の文体は直截的であり、変な飾り気もない。

最初の旅行で、フォーチューンが中国の内部深く入れなかったのは、その当時の状況からして当然であろう。他のヨーロッパ人から、どの辺へ行けば、植物採集が成功するかという情報を全く得ることができなかった。

フォーチューンの最初の著作の「Northern Provinces」は明らかに正しい内容を伝えていない。かれが行った最北の地は肅州であって、それもたった一度である。かれは「北」といったのは、「上海」であった。かれが考えていた中国はずっと南の地域だけであった。このはじめての旅行もホンコンから出発して、厦門，寧波，舟山などを探ったが、非常に成功であった。条約港から30マイル以上遠くには行かなかったけれども、かれの採集した内容はじつに質が高かった。これはかれの正確な判断によるのだろうが、これ以後の旅行においても、この質の高さは変らなかった。

かれが英国へもたらした最初の花はAnemone Japonicaであるといわれるが、この花はどういう花であろうか。また、かれが好きだった花（英国へ紹介したうちで）はWeigela roseaとされ、これは日本原産だそうである。どなたか知っている方があれば、日本名を教えていただきたい。いずれにしろ、フォーチューンと日本の草花が関わりあったことは心楽しい。

1846年に英国へ帰って、フォーチューンは1848年にはふたたび中国へと渡る。今度は東インド会社から依頼をうけた。今度の旅行の目的は、中国茶をインドに紹介することであった。東インド会社はシッキムとアッサムで茶の栽培をしようと目論んでいた。英国での茶の需要が増え、その輸入代金をまかなうほどアヘンの諭出が増えなかったのである。これは英国経済にとっては重大な仕事であった。結局、かれは1851年2月に自ら2,000本の茶の苗木、17,000本の発芽したばかりの実生の苗、6人の製茶の専門家をたずさえて、カルカッタにやって来た。

1852年末に、東インド会社はふたたびフォーチューンに中国へ行って茶の種子と苗を採集するように依頼した。1853年から1856年にかけて、かれは第三次遠征に従事した。この旅行は前の二回の旅行に比べると不振であったが、それでも、英国での新しい交配種のシャクナゲの育生に重要な役割を果したRhododendron Fortuneiをもたらした。

ヴェリエル・エルウィン小伝

連載（10）

転身・訣別・離反　～その4～

藤井　毅

≪「私の最も近くに住むイギリス人の隣人は百マイルも彼方のことで、私はそのような中で、トライブの人々と共に働きくつろがねばならなかったのである。

更に私には、役人・宣教師のどちらも持ちえなかった程の利点があった。私は単に人好きのする愛想の良い、誰にでも何にでも興味を持つ風変りな男であり、彼らにとって私は思いついたことは何でも話すことのできる人間だったのである。

私はまさにブーミア・サーハブ（Bhumia-sahib＝土地の旦那程の意味）であった。

民族誌学者が受けることのできる最大の賛辞をパーンダリアー地区の一人のバイガから受けたことがある。私達は彼の村を訪れ非常に暖かく迎えられたのだが、役人が巡察にやってきたときのような大騒ぎに特別扱いの歓迎行事もなされなかった。私達一行のひとりがそれを訝って村人に言った。"重要人物に違いないサーハブがいらしたのにどうしてしかるべき歓迎の準備をしないのか"。そのバイガは笑って答えた。"その人はただのバラー・バーイーなんですよ"――それが私の普通の呼び名であった――"あの人がやって来ても、ああ　あのバラー・バーイーが来たのか、なら別に気をつかわなくてもいいだろう……、という位身内同然の普通の人なんですよ"。≫

（The Baiga, London, 1939. repr. New York, AMS, 1979, xxix.）

1930年代、植民地下のインドでイギリス人であるエルウィンに対して語られた言葉である。

中央インドはエルウィンにとって、まさにその思想の揺籃の地であった。そこで見聞きしたものは彼を変え、やがて根付いていった。後年彼が展開していったその関心・問題意識は、すべてこの中央インドでの生活に源をたどることができるのである。しかし同時に、終生エルウィンにつきまとい離れることのなかった、「分離主義者」という批難も、この時期の産物であったのである。

連載《余録》

エルウィンがNEFA に招聘され、その政策決定と実施の中枢に関与するようになったのは、死のわずか十年前、1954年のことであった。そして、その十年間の仕事とそれへの評価のみが一人歩きし、彼のたどった軌跡と具体的な仕事は触れられることなく、ある片寄ったイメージが固定化されてきてしまった。すべての人々が限定された特定の問題を深く理解するというのは困難なことであり、それはある面で仕方のないことなのかもしれない。ましてそれが、エルウィンという複雑な生涯を送った一個人にかかわることであればなおさらのことであろう。

最近、エルウィンがその死の十年前よりかかわった地域にも関心を持つ人々が少数ながら登場してきた。それ自体は皆無の状態に比べれば歓迎すべきことなのかもしれない。しかし、問題はその質である。容易な方法によるルーツ探しや"探検"気どり、あるいは「未知」や「秘境」を声高に語るだけでは意味をなさないであろう。個人的レベ

ルでの「未知」を社会的レベルで通用させてはならない。それは彼の地に暮す人々にとって無縁であるばかりか、迷惑を及ぼすものですらある。ＮＥＦＡに至る以前のエルウィンの足跡に固執したのは、そのことへの抵抗といえば大げさになる試みであった。

エルウィンが二十年以上暮した中央インド、そこは多くは丘陵域であった。そして十年の歳月を過したＮＥＦＡ（今のアルナーチャル）はまさに東部ヒマラヤの山懐である。そういうエルウィンにとって、“山”ないしは“ヒマラヤ”はどううつり、どの程度の関心を抱いていたのだろうか。

彼はその文章の中で自然を描きその美しさを讃えることは全く無かったわけではない。たとえば、中央インドに定着した最初の頃、自分の暮す周辺の自然を描いた文章は今もってその風景とジャングルの熱気までも彷彿とさせるものがある。しかし、彼にとってそのような自然が魅力的に映ったのも、あくまでもそこに魅力的な人間が暮していたからである。無人域の自然には彼はほとんど無関心であった。

エルウィンの関心は徹頭徹尾そこに暮す人間にあり、彼らの抱える問題とそのすばらしさを描くことに総括しているのである。そこでは“山”や“丘陵”はまさに生活の場としてのものであり、その範囲内での関心しか払われなかった。東部ヒマラヤの山々もモーンパー（Monpa）の人々が暮す土地にそびえる単に雪を頂いた“山”でしかなかった。

東部ヒマラヤの山麓域に関心を抱き何らかの手懸りを得ようとするとき、エルウィンの執筆・編集した著作は確かに有難いものである。しかし、皮肉と言うべきか、彼自身“ヒマラヤ”には生活域に存在する“山”といった程度の関心しか抱いておらず、“登山”とは全く無縁であったのである。

エルウィンが死に先立つ十年間に執筆・編纂したＮＥＦＡにまつわる文献は、行政府にかかわり以前とは全く異った条件下で生活しなければならなかったため、中央インド時代のものと比べるとかなり異質なものとなっている。そこにはもはや、一カ所に長期間暮すことによって得られる生活記録に類する著作は存在しない。そのほとんどが総花的なものでしかない。ある意味で、中央インドでの幸福な時代は終りを告げていたのである。しかし、連載第一回で記したように、彼はその自分自身の変化、その抱え込まざるを得なくなった矛盾には十分気付いていたのである。それでいてなおかつエルウィンを支えていたものは何であったのだろうか。それはその地に暮す人々とその抱える問題への大きな関心であったのである。そしてそれは中央インドで培われたものなのである。

“山”ないし“ヒマラヤ”という単語をとうとう一回も使うことなく、連載は十回を数えてしまった。この「小伝」も彼が中央インドに定着し、ＮＥＦＡへと向う第一歩を踏み出したところまでを跡付けた段階で、一時小休止させていただきたいと思う。次回は、1954年にＮＥＦＡに迎えられてから1964年の死去までの十年間に焦点をあてて考えてみたい。

≪余録≫に書いた通り、ここでもう一度私達のその地方への認識の質と、エルウィン自体の仕事をも再検討してかからねばならないのである。

エルウィンが関心を抱いた人々にとって、ではいったいエルウィンはどのように映ったのであろうか。そして、彼の抱えこまざるを得なくなった矛盾とは何であったのかということは、未だに回答のでない問題なのである。

＝第一部終り＝

事務局日誌

月日	曜	摘　　要
4.28	月	「ヒマラヤ」103号印刷依頼
5.1	水	カンチェンジュンガ遠征隊合宿（剣岳）、会計事務整理
2	金	80年登山学校合宿（富士山）
3	土	
4	日	
5	月	
6	火	会計事務整理
7	水	〃　〃
8	木	〃　〃
9	金	名簿作成事務
10	土	〃　〃
12	月	財務協議（名古屋）
5.13	火	岳人編集部との打合（東京）、事務局協議（ルーム）
16	金	第4回日本ヒマラヤ会議企画
20	火	都岳連評議員会、山書の会ルーム使用
21	水	資金対策（金沢）
22	木	「ヒマラヤ」103号印刷完了、岳人・山渓等にインフォメーション依頼
23	金	インタビュー（インド政府観光局）
24	土	「ヒマラヤ」103号発送
26	月	藤江先生と展覧会の件協議
27	火	第2回東京定例集会（ルーム）
28	水	「ヒマラヤ」各委託店へ委託
30	金	財務協議（名古屋，東京）
31	土	〃　（名古屋，東京）、カンチェンジュンガ委員会（ルーム）

寸　感

最近中国の山がよく話題になる。ＪＡＣ隊も北稜と北壁からのチョモランマに成功し、また数隊の日本登山隊にも許可が来ているようだ。

中国も登山を観光資源として開発しつつあるようだが、情報量が少ない事にもより、未知なる事が数多い。

今月は、ヒマラヤ山脈の北側、中国とモンゴルについて特集を組んでみた。幾許かでも参考資料として使用されれば幸甚である。(I)

ヒマラヤNo.104（7月号）

昭和55年6月10日印刷　55年7月1日発行

発行人　柴田　金之助

編集人　伊東　満

発行所　日本ヒマラヤ協会

〒160東京都新宿区高田馬場3−23−1−506

原稿募集

ニュース　ヒマラヤ（中央アジア含む）の各地域の社会情勢・現地事情（入山事情）の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀　行　遠征、トレッキング、旅　etc……。

ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。“記録”ではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6～8枚程度、横書きでお願いします。

日本からヒマラヤから　ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。「ヒマラヤ」編集部やＨＡＪに対する提言などもお寄せ下さい。

またヒマラマ地域へ出かけられる方、ハガキで結構ですから御一報下さい。

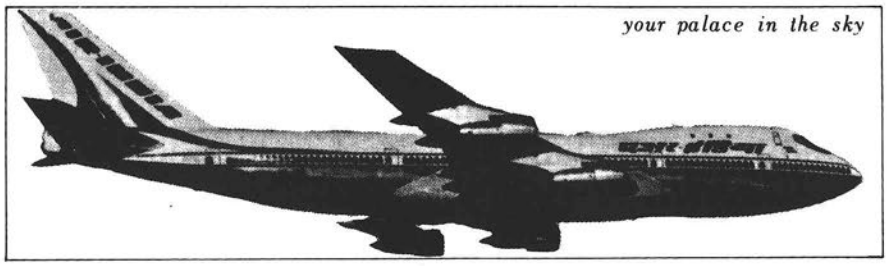
★　投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

ヒマラヤへの装備

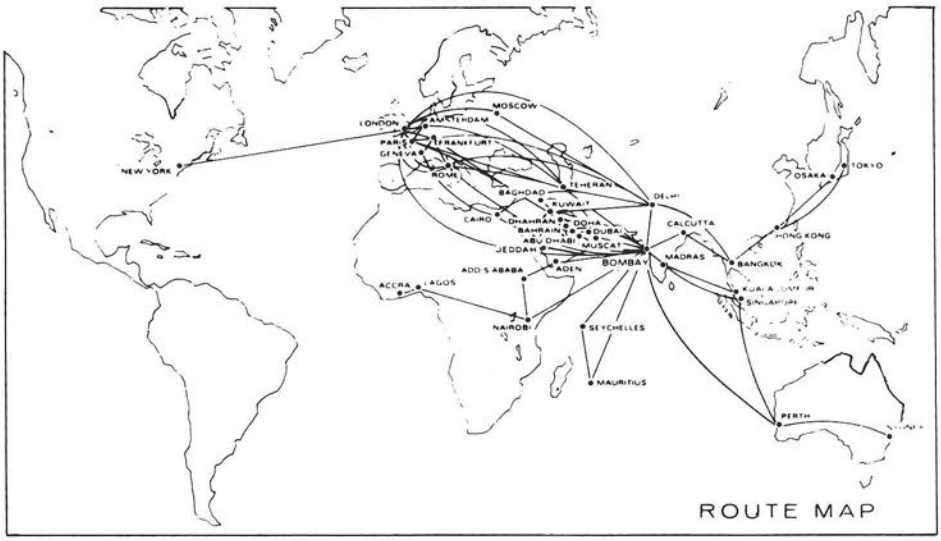
◎遠征隊の装備、相談にのります。

ICI 石井スポーツ

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2 − 2 − 3 ☎03 (208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1 −16− 7 ☎03 (346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2 − 8 −14☎03 (264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2 − 8 − 6 ☎03 (264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町 2 −123☎0486 (41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105☎0273 (27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2 −19−10東和ビル内☎03 (200) 7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の群井(HAJ会員)まで、お問い合わせ下さい。

名古屋●中村区名駅四丁目7－35ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450☎(052)583－0747

世界の40都市をネットする

エア・インディア

東　京	●千代田区有楽町日比谷パークビル	〒100☎(03) 214-7631
横　浜	●中区常盤1－2関内日本ビル	〒231☎(045) 651-2874
大　阪	●東区備後町松豊ビル	〒541☎(06) 264-1781
神　戸	●葺合区布引2－1－3新布引ビル	〒651☎(078) 222-1919
福　岡	●博多区博多駅前1－3－21八重州ビル	〒812☎(092) 471-7172